第７章　吉田構内大学会館排水管布設に伴う発掘調査

１　調査の経過

調査地区は構内地区割でいうＫ・Ｌ－13区にあたる。周辺地域一帯では吉田遺跡調査団および埋蔵文化財資料館による数次にわたる発掘調査の結果、弥生時代前期から中・近世にかけての多数の遺構が検出され、あわせて多量の遺物が出土している。本部管理棟２号館新営に伴い発掘調査を実施したＬ－14区[1)]では、弥生時代中・後期の土壙および環濠をもつ室町時代の建物跡に加え、弥生時代前期から古墳時代にかけての遺物包含層が検出されている。また、大学会館新営に伴うＭ・Ｎ－12区の調査[2)]では、県内では類例をみない古墳時代前期に遡るものをはじめとして平安時代後期にいたる井戸６基が検出されている。また、遺物包含層からは多量の弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、輸入陶磁器、石器のほか下駄等の木製品が出土した。さらに、注目すべき資料として、黒色土器、瓦器、緑釉陶器等の土器、石銙帯、木簡が伴出しており、キャンパス内に展開する遺跡群の位置づけと絡み、生産・流通および搬入経路をめぐって防長における古代～中世史の解明に寄与する貴重な資料を提供した。

今後検討を要するであろう上記の資料が出土し、かつ、キャンパス内においても極めて遺構・遺物の分布密度の高い当該地域に大学会館新営に伴う付随工事として排水管埋設が計画された。これをうけて、学内関係諸機関、諸部局と協議の結果、管路幅を縮少し最少限の掘

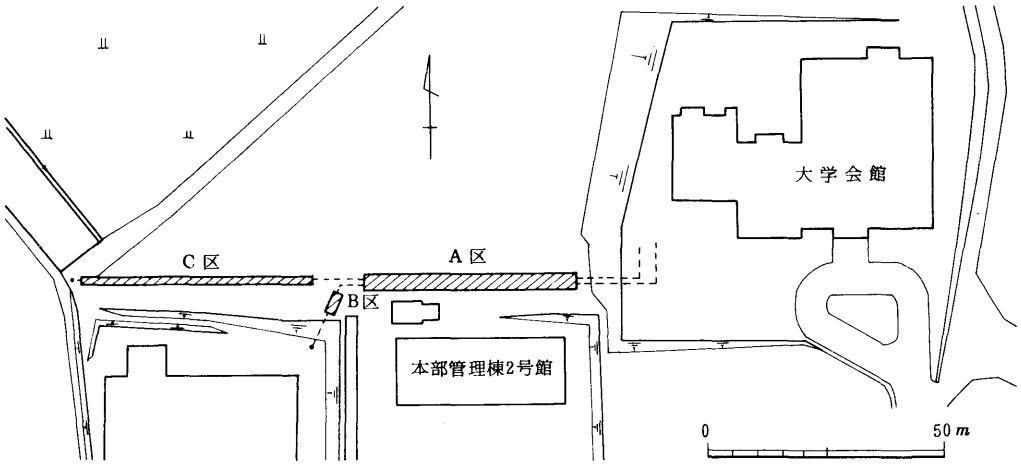


Fig. 23　調査区位置図

削工事幅にとどめることで合意が得られ、現状変更を伴う約 180 ㎡について発掘調査を実施した。調査は人文学部考古学研究室の協力を得て、昭和59年9月10日から10月8日にかけて行なった。

配管工事管路は大学会館以東、現駐車場に至る総延長距離約 112 m であるが、調査は電話ケーブルの埋設されている管路中央部を回避し、便宜上東から幅 2.5 m、長さ 45 m の地区（A区）、幅 1.5 m、長さ 40 m の地区（C区）および管路中央部より分岐する幅 2.5 m、長さ 4 m（B区）の三地区に区分して実施した。

なお、腐蝕土および構内造成時等の置土を含む表土、旧耕作土等は機械を使用して除去し、それ以下は人力による分層発掘を行なった。

〔注〕

1）山口大学埋蔵文化財資料館「昭和54・55年度調査の概要」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅰ』、1982年)。

2）山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内大学会館新営に伴う発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』、1985年)。

2 層 位

A区 現地表面の標高は東端部で約 22.00 m、西端部で約 21.50 m で、わずかではあるが東から西へ下降している。第1層は腐蝕土および構内造成時等の置土を含む表土で、$y=570$ 付近以東は約65～90 cm の厚さをもつにすぎないが、以西は約 130 ～ 140 cm の堆積を示す。第2a・b層は旧耕作土。第2a層は $y=570$ 付近では堆積が認められず、$y=570$ 以東と以西の下面は標高差にして約80 cm 東部が高所に位置する。また、第4・5層の2層におよぶ客土が認められることから、調査区内には高低差をもつ少なくとも二枚の耕作面が存在していたものと推察される。床土は存在しない。$y=577$ 以東は旧耕作土直下が黄橙色粘質土の地山である。しかし、以西は旧耕作土が部分的に残存し、一部の柱穴等の検出面となる遺物包含層を介して地山へ達する。

地山面の標高は東半部が約 20.90 ～ 21.10 m であるが、中央部 $y=568$ ～ 575 間で東から西へ標高差にして約1 m 下降し、西半部では約 19.90 ～ 20.00 m である。

B区 現地表面の標高は約 21.40 m である。A区同様上位から表土、旧耕作土の順に堆積する。それ以下は黄橙褐色粘質土の地山に至るまで少なくとも3層に分層される厚さ50～65 cm の古墳時代から中世にかけての遺物包含層が認められる。

地山面の標高はおおむね 19.35 m であるが、北西隅において地山が南から北へゆるやかに下降を始めており、周辺地域に存在する低丘陵の一支丘縁辺部にあたるものと推察される。

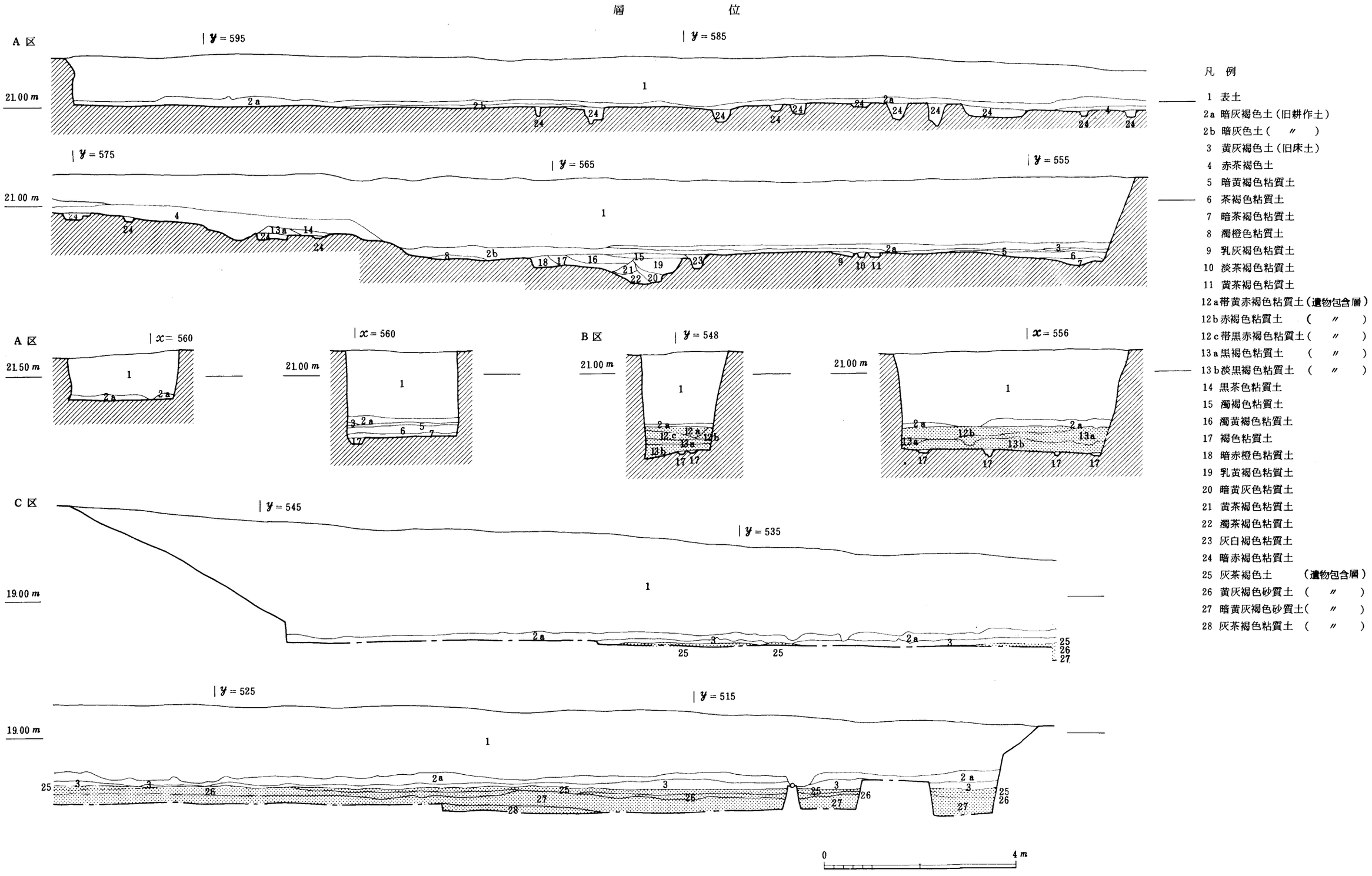

層　位
A 区
y = 595
y = 585
21.00 m
y = 575
y = 565
y = 555
21.00 m
A 区
x = 560
21.50 m
x = 560
21.00 m
B 区
y = 548
21.00 m
x = 556
21.00 m
C 区
y = 545
y = 535
19.00 m
y = 525
y = 515
19.00 m
0
4 m
凡　例
1 表土
2a 暗灰褐色土（旧耕作土）
2b 暗灰色土（　〃　）
3 黄灰褐色土（旧床土）
4 赤茶褐色土
5 暗黄褐色粘質土
6 茶褐色粘質土
7 暗茶褐色粘質土
8 濁橙色粘質土
9 乳灰褐色粘質土
10 淡茶褐色粘質土
11 黄茶褐色粘質土
12a 帯黄赤褐色粘質土（遺物包含層）
12b 赤褐色粘質土　（　〃　）
12c 帯黒赤褐色粘質土（　〃　）
13a 黒褐色粘質土　（　〃　）
13b 淡黒褐色粘質土　（　〃　）
14 黒茶色粘質土
15 濁褐色粘質土
16 濁黄褐色粘質土
17 褐色粘質土
18 暗赤橙色粘質土
19 乳黄褐色粘質土
20 暗黄灰色粘質土
21 黄茶褐色粘質土
22 濁茶褐色粘質土
23 灰白褐色粘質土
24 暗赤褐色粘質土
25 灰茶褐色土　（遺物包含層）
26 黄灰褐色砂質土（　〃　）
27 暗黄灰褐色砂質土（　〃　）
28 灰茶褐色粘質土（　〃　）

Fig. 24　土　層　断　面　図

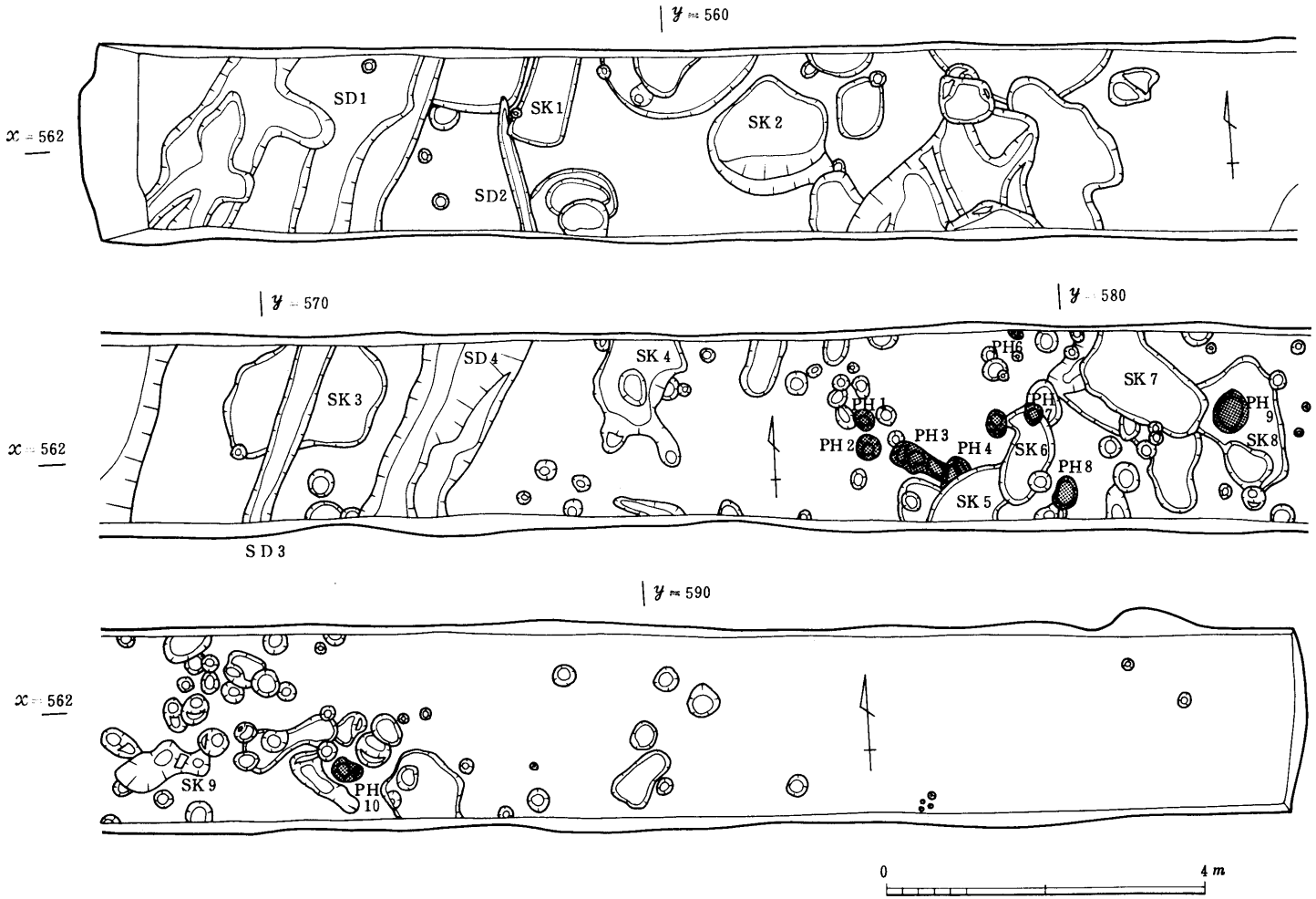


Fig. 25　A区遺構配置図

C区　現地表面は東端部で標高約21.00 *m*、西端部で約19.15 *m*で、平均5／100の下降率をもち、東から西へ下降している。このみかけ上の標高差は第2層：旧耕作土の下面標高が東半部で約18.30 *m*、西半部で約18.20 *m*と比較的起伏の少ない堆積状況を示すことから旧地形とは無関係の第1層：表土の堆積厚の差異によるものである。第3層は旧床土、第25層：灰茶褐色土層以下は西半部で認められるように少なくとも4層に分層される遺物包含層が堆積するが、各堆積層はいずれも二次堆積層で弥生時代から中世にかけての時期幅をもつ遺物を包含する。

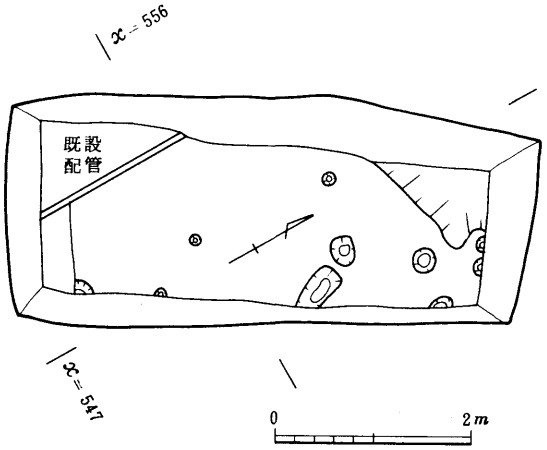


Fig. 26　B区遺構配置図

なお、調査は安全面を考慮し、西半部において第28層：灰茶褐色粘質土層を一部検出するにとどめ、地山は確認していない。

3　遺　構

A区で土壙約30基、溝4条、柱穴多数、B区で柱穴若干が検出された。本稿ではA区での検出遺構を中心に述べることにする。

1　柱穴

$y = 574$ 付近から $y = 587$ 付近にかけて密集して検出された。しかし、調査面積が狭少なためか遺構としてまとまった柱穴群の把握はできなかった。出土遺物には弥生土器、土師器、瓦質土器、国産陶磁器があり、一部弥生時代後期に遡るものもあるが、大半は鎌倉時代後半から室町時代のものである。

2　土壙

平面形態が長方形に近いもの（ＳＫ１・７）、円形に近いもの（ＳＫ２）、および不整形なもの（ＳＫ３・６）の三種がある。以下、代表的なものについて述べることにする。

ＳＫ１（Fig. 27）

調査区東端部 $x = 563$、$y = 558.5$ 付近で検出された土壙で、ＳＤ２を切っている。北半部は調査区外にあたるため未検出であるが、平面形態は長方形に近いものと考えられる。

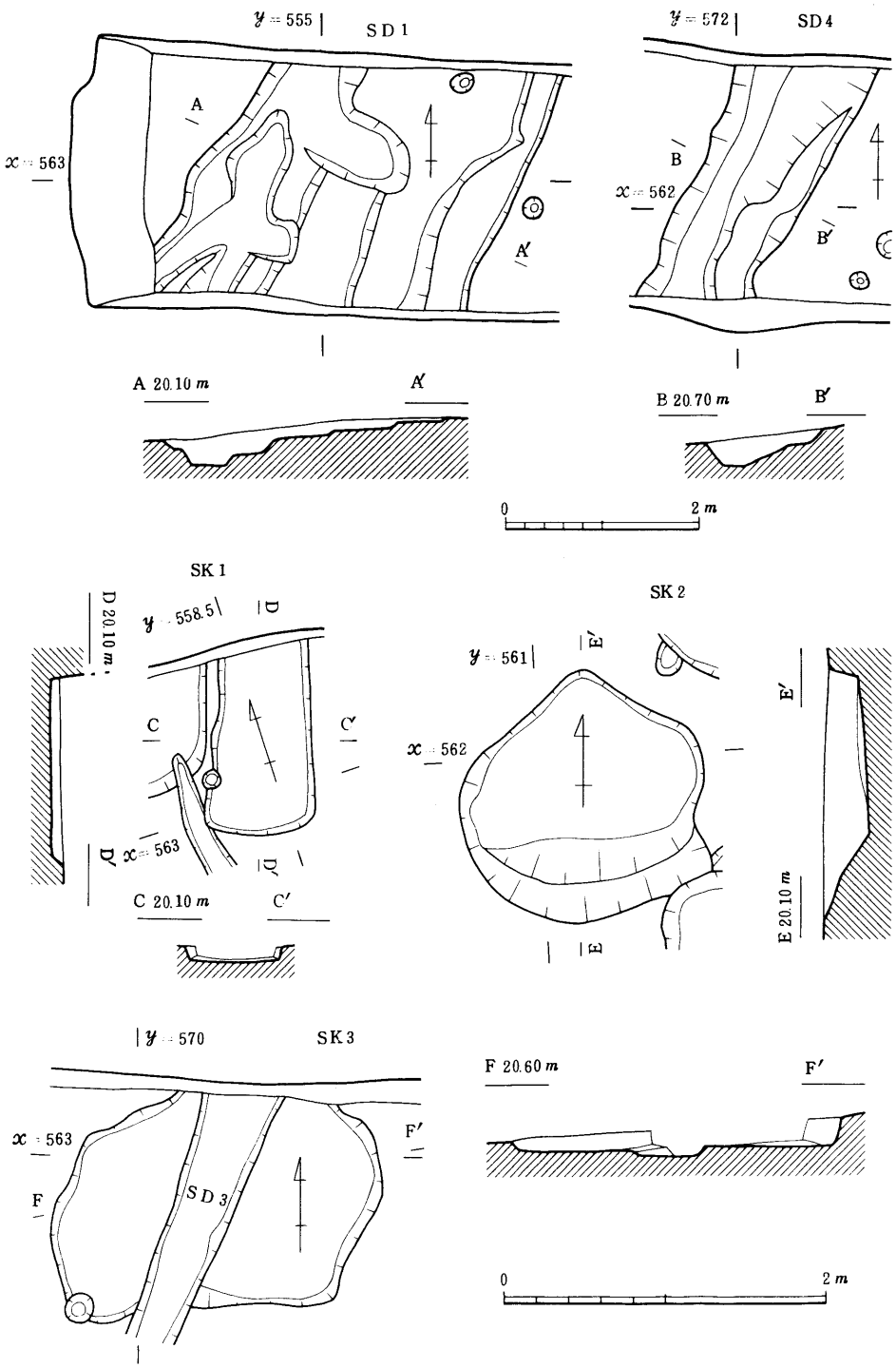


Fig. 27　A区SD1・4、SK1～3実測図

長軸112 cm以上、短軸60cm、検出面からの深さは5.0～6.5 cmで、床面は北から南へわずかに下降している。床面より若干上位で歴史時代の土師器甕等が出土したが図示しうるものはない。

ＳＫ２（Fig. 27）

$x = 563$、$y = 561$ 付近で検出された土壙で、他の土壙によって南東隅を切られている。平面形態は五角形に近い円形で、径約145 cm、検出面からの深さは最深部の中央部で25cmである。出土遺物には鞴口がある。

ＳＫ３（Fig. 27）

$x = 563$、$y = 570$ 付近で検出された平面形態が不整形の土壙で、ＳＤ３によって中央部を切られている。長軸202 cm、短軸130 cm以上の規模をもつ。床面は西から東へ下降しており、検出面からの深さは最浅部で6 cm、最深部で19cmである。出土遺物には弥生土器の甕があり、弥生時代後期の所産である。

３　溝

ＳＤ１（Fig. 27）

調査区西隅で検出された溝で北東－南西に流路をもつ。幅3.65 m以上、検出面からの深さは30～33 cmで、中央部のみ38 cmの深さをもつ。溝の断面形は扁平な階段状を呈する。溝内の堆積土は２層みられ、上位から暗茶褐色粘質土、黒茶褐色粘質土の順に堆積する。出土遺物には土師器の高坏があり、溝の下限は古墳時代前期である。

ＳＤ２

他の３条の溝と異なり南－北に走るが、北への延長部分は検出されなかった。ＳＫ１に切られており、中央部 $x = 562.5$ 付近で幅20cm、検出面からの深さ９cmである。溝内に充塡した暗灰褐色砂質土から土師器、須恵器が出土したが、図示できるものはない。

ＳＤ３

$y = 570$ 付近で検出された北東－南西に流路をもつ溝で、ＳＫ３を切っている。北に向かうにつれてわずかに幅を増し、南端部で30cm、北端部で40 cmである。検出面からの深さはわずかに４cmである。溝内に堆積する暗赤褐色粘質土からの出土遺物は皆無であった。

ＳＤ４（Fig. 27）

ＳＤ３に近接して検出された北東－南西に流路をもつ溝で、南東部で柱穴を切っている。中央部 $x = 562$ 付近で幅100 cm、検出面からの深さ24cmの規模をもつ。溝の断面形は「U」字形。溝内に充塡した暗茶褐色粘質土から土師器、瓦質土器、石製品が出土した。

遺　物

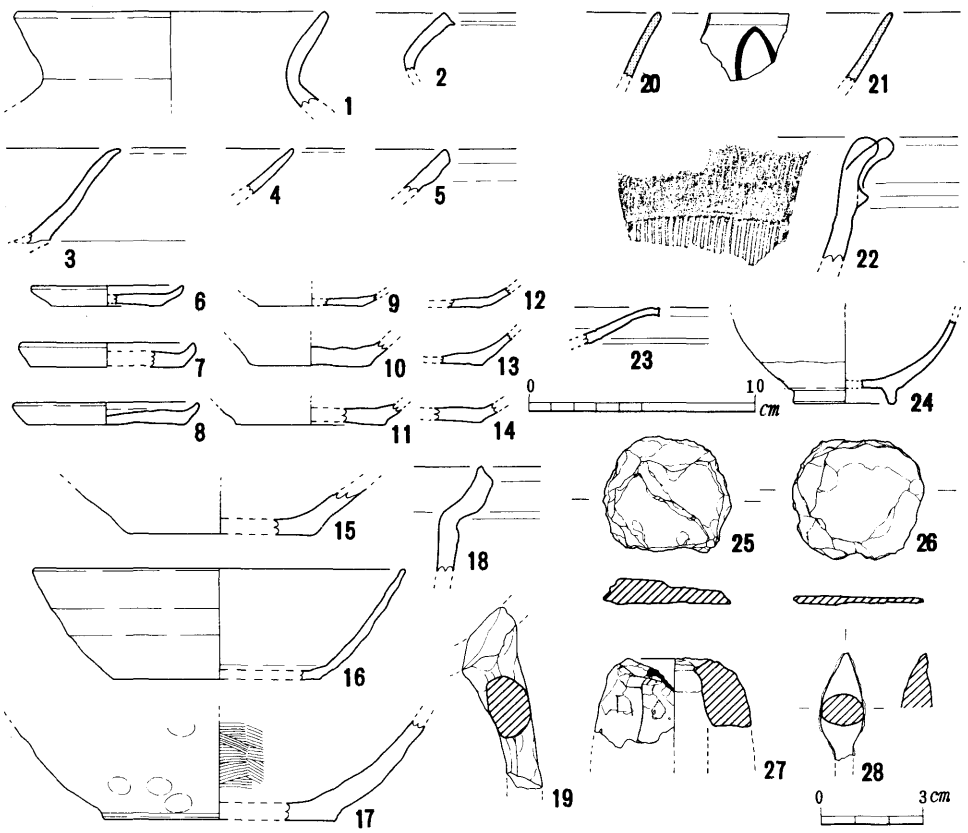


Fig. 28　出土遺物実測図

なお、本溝は昭和56年度に実施した本部管理棟２号館新営に伴うＬ－14区の発掘調査[1]の際検出された室町時代の建物跡をめぐる環濠の北への延長部分と考えられる。（河　村）

〔注〕

1）山口大学埋蔵文化財資料館「昭和54・55年度調査の概要」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅰ』、1982年）。

4　遺　物

土壙、溝、ピットより出土した。出土遺物には弥生土器、土師器、瓦質土器、輸入陶磁器、国産陶磁器、土製品、鉄製品等があるが、そのほとんどが破片であり量的にも多くはない。以下では、図示可能なものについて器種別に述べる。

弥生土器（Fig. 28，1・2）

1、2は甕の口縁部で体部より「く」の字状に外反する。2は口縁端部に面をもつ。1

Tab. 4　出土遺物観察表

①口径（復原値）　②底径（復原値）　③器高（現在高）　④最大厚

番号	器種	法量（cm）	色調	胎土	焼成	備考
弥生土器						
1	甕	①(13.4)③(4.2)	にぶい黄橙色(10YR)	やや粗い　0.1～0.4cm程度の砂粒を多量含む	やや軟	SK3 約5/6欠失
2	甕	③(2.6)	内面—灰白色(7.5YR)　外面—にぶい褐色(7.5YR)	良　0.1cm程度の砂粒を微量含む	良好	PH10
土師器						
3	高坏	③(3.9)	浅黄橙色(7.5YR)	精良	良好	SD1
4	坏	③(2.0)	内面—明黄褐色(10YR)　外面—橙色(7.5YR)	良　微砂を若干含む	良好	PH5
5	甕	③(1.8)	にぶい黄橙色(10YR)	良　0.1cm程度の砂粒を少量含む	良好	SK6
6	皿	①(6.6)②(4.8)③0.9	橙色(5YR)	良　0.1～0.3cm程度の砂粒を少量含む	良好	PH6 約3/4欠失
7	皿	①(7.6)②(6.7)③1.1	浅黄橙色(10YR)	良　微砂を若干含む	良好	PH7 約4/5欠失
8	皿	①(8.0)②(6.8)③1.0	にぶい黄橙色(10YR)	良　0.1～0.2cm程度の砂粒を微量含む	良好	PH4 約3/4欠失
9	皿	②(4.5)③(0.6)	内面—橙色(10YR)　外面—橙色(5YR)	良　0.1cm程度の砂粒を微量含む	良好	PH2 約2/3欠失
10	皿	②(5.2)③(1.2)	内面—橙色(7.5YR)　外面—橙色(5YR)	良　微砂及び金雲母を若干含む	良好	SK5
11	皿	②(6.4)③(0.9)	橙色(7.5YR)	良　0.1cm程度の砂粒を微量含む	良好	PH2 約4/5欠失
12	皿	③(0.9)	淡黄色(2.5Y)	良　微砂を若干含む	良好	PH8
13	皿	③(1.5)	橙色(5YR)	精良	良好	SK9
14	皿	③(0.9)	橙色(7.5YR)	精良　微砂を若干含む	良好	攪乱層
15	坏	②(8.0)③(2.1)	内面—にぶい黄橙色(10YR)　外面—橙色(7.5YR)	良　微砂及び金雲母を含む	良好	PH4 約4/5欠失
16	坏	①(16.2)②(8.8)③4.8	灰白色(10YR)、外面一部褐灰色(10YR)	良　0.1～0.2cm程度の砂粒を微量含む	良好	PH3 約5/6欠失
瓦質土器						
17	壺	②(10.0)③(4.5)	明褐灰色(7.5YR)、外面一部褐灰色(10YR)	良　0.2cm程度の砂粒を少量含む	良好	RH3 約4/7欠失
18	土鍋	③(4.6)	灰白色(10YR)	良　0.1～0.3cm程度の砂粒を少量含む	良好	SD4 外面に煤付着
19	土鍋(脚)		にぶい黄橙色(10YR)、一部灰色(5Y)	良　0.2cm程度の砂粒を含む	良好	攪乱層
輸入陶磁器						
20	椀	③(3.1)	素地—灰白色(5Y)　釉—オリーブ黄色(5Y)	精良	良好	SK4
21	椀	③(2.9)	素地—灰黄色(2.5Y)　釉—オリーブ灰色(10Y)	精良	良好	PH1
国産陶磁器						
22	擂鉢	③(5.5)	素地—橙色(7.5YR)　釉—褐灰色(5YR)	精良	良好	PH1
23	皿	③(2.1)	素地—浅黄色(2.5Y)　釉—透明	精良	良好	PH9
24	椀	②(4.4)③(3.7)	素地—にぶい黄橙色(10YR)　釉—乳白色	精良	良好	PH1 約3/4欠失
その他						
25	用途不明石器	④1.1	灰色(N)　光沢あり			SD4 結晶片岩製
26	用途不明石器	④0.4	灰色(N)　光沢あり			SD4 結晶片岩製
27	鞴口		内面—橙色(5YR)　外面—灰白色(5Y)	精良		SK2 先端部に銅鉾？付着
28	鉄鏃	③(3.1)④0.9				SK8 銹化が著しい

（色調は農林省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』1976による）

は口縁部外面は横ナデ、頸部以下は縦方向の刷毛目による調整である。1の内面および2は磨滅しており調整は不明。

土師器（Fig.28，3～16）

3は高坏の坏部。口縁部は外上方へ直線的に立ち上がり端部はわずかに外反する。風化が著しいが外面に横方向の篦磨きの跡が観察される。4は坏の口縁部で端部は丸みを帯びる。5は甕の口縁部。4、5は外面が横ナデ調整、内面は器面荒れのため不明。6～14はやや上げ底を呈する小皿である。底部の切り離し方法は、不明の6、10を除きすべて糸切り。7～11、13、14は内外面とも横ナデ調整。他は器面磨滅のため不明。15、16は坏。16はかなり薄手で、体部は内彎ぎみに斜上方へ立ち上がり、端部は丸くおさめる。調整は外面上半部が横ナデ、下半部には指頭圧痕がわずかに残る。内面は磨滅のため不明。

瓦質土器（Fig.28，17～19）

17は壷の底部で、体部はやや内彎しながら斜上方へ立ち上がる。内面は横方向の刷毛目調整。外面はナデ仕上げであるがナデきれておらず、成形時の指頭圧痕および下位に縦方向の刷毛目が残る。外底に板状圧痕が認められる。18、19は鍋。18は口縁部から体部にかけての破片である。口縁部は中位で屈曲し、端部をわずかにつまみ上げる。口縁部内外面は横ナデ、体部外面は縦刷毛目による調整。19は脚で、篦削り後指頭による成形を行なう。

輸入陶磁器（Fig.28，20・21）

いずれも青磁埦の口縁部。20は外面に片彫りの蓮弁文様を有する。横田賢次郎・森田勉氏分類[1]の龍泉窯系青磁のI－5・a類に該当する。21は体部が内彎ぎみに立ち上がり口縁部はやや外反する。

国産陶磁器（Fig.28，22～24）

22は片口の擂鉢で、口縁部直下に一条の断面三角形の突帯が巡る。体部はやや内彎しながら立ち上がり、口縁部は肥厚しながら短く外反する。端部は丸くおさめる。外面は横ナデ、内面上半部は縦方向の刷毛目の後横ナデ調整。内面下半部は櫛状工具による縦方向の筋目を施す。23は皿の口縁部片で、口縁端部を上方へつまみ上げる。外面には断面三角形の低い二条の突帯を貼り付け、体部内面には一条の沈線が巡る。内外面に透明の釉を施す。24は埦で、「八」の字状に開く高台をもち体部は内彎しながら立ち上がる。

その他の遺物（Fig.28，25～28）

25、26は円板状の石製品である。25は最大径5.6㎝、重量42.4ｇ、26は最大径6.0㎝、重量14.9ｇ。いずれも結晶片岩製。27は土製の鞴口片[2]。火口部分の破片で、高熱を受け表面に亀裂

を生じている。28は両丸造と思われる鉄鏃の刃部。

これらの時期について概述すると、まず弥生土器は弥生時代中頃のものであろう。次に土師器は、3の高坏が古墳時代、その他はすべて中世以降のものである。坏、椀、甕は平安時代終末～鎌倉時代頃、小皿は鎌倉時代後半頃に比定される。9、12の薄手の小皿は室町時代に下る可能性もある。また瓦質土器は室町時代頃、輸入陶磁器は平安時代終末～鎌倉時代初頭頃のものであろう。国産陶磁器は近世以降のものとみられる。

以上のように出土遺物には弥生時代から近世まで各時代のものがありかなり時期幅がある。（福　島）

〔注〕

1）横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について―型式分類と編年を中心として―」（『九州歴史資料館研究論集』4、九州歴史資料館、1978年）。

2）昭和60年度の吉田構内保存地区における調査で古墳時代後期のものとみられる鞴口片が出土している。山口大学埋蔵文化財資料館『山口大学構内遺跡保存地区現地説明会資料』（1985年）。

5　小　結

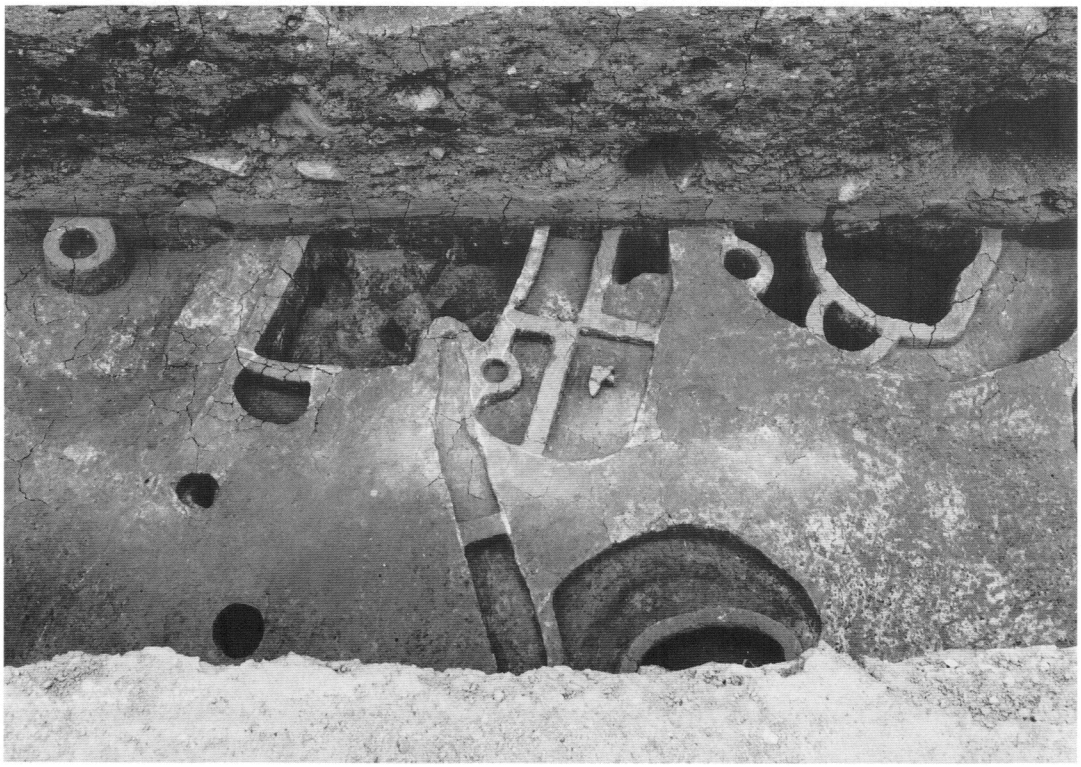
今回は大学会館新営の付随工事として現状変更を伴う約180㎡について事前に調査を実施したものである。A区においては弥生時代後期から室町時代の土壙、溝、柱穴が多数検出されたが、後世の削平により遺構としてのまとまりが把握できるものは少ない。しかし、共伴関係および時期は不明であるが、SK2から鞴口、SK8からは鉄鏃が出土した。鞴口は昭和60年度吉田構内保存地区（Ⅰ－20区）で古墳時代後期のものが旧河川跡から出土している。本学では2例目を数えるが、今回の調査区北東域は昭和58年度に、石銙帯、緑釉陶器、木簡等注目すべき遺物が出土した大学会館新営に伴う調査地域にあたり、中世吉田氏の社会的、経済的、政治的背景をさぐるうえでの貴重な資料となった。また、昭和54年度本部管理棟2号館新営に伴う調査で検出された室町時代の屋敷跡をめぐる環濠西辺の延長部分が検出されたことも特筆される。B区では若干の柱穴を検出したが、C区では弥生時代から中世にかけての遺物を包含する自然堆積層が認められた。したがって、B区北東端での地山の落ち込みから、当該地域周辺では$y=550$付近以西は谷あいの低湿地に立地していることが判明し、キャンパス内における遺跡立地の具体的なあり方の一端を理解することができるとともに、弥生時代前期から室町時代にかけての集落範囲、規模、時期的な変遷を知りうる具体的な資料が得られた。（河　村）

(1) A区遺構分布状況（西から）

(2) A区遺構分布状況（東から）

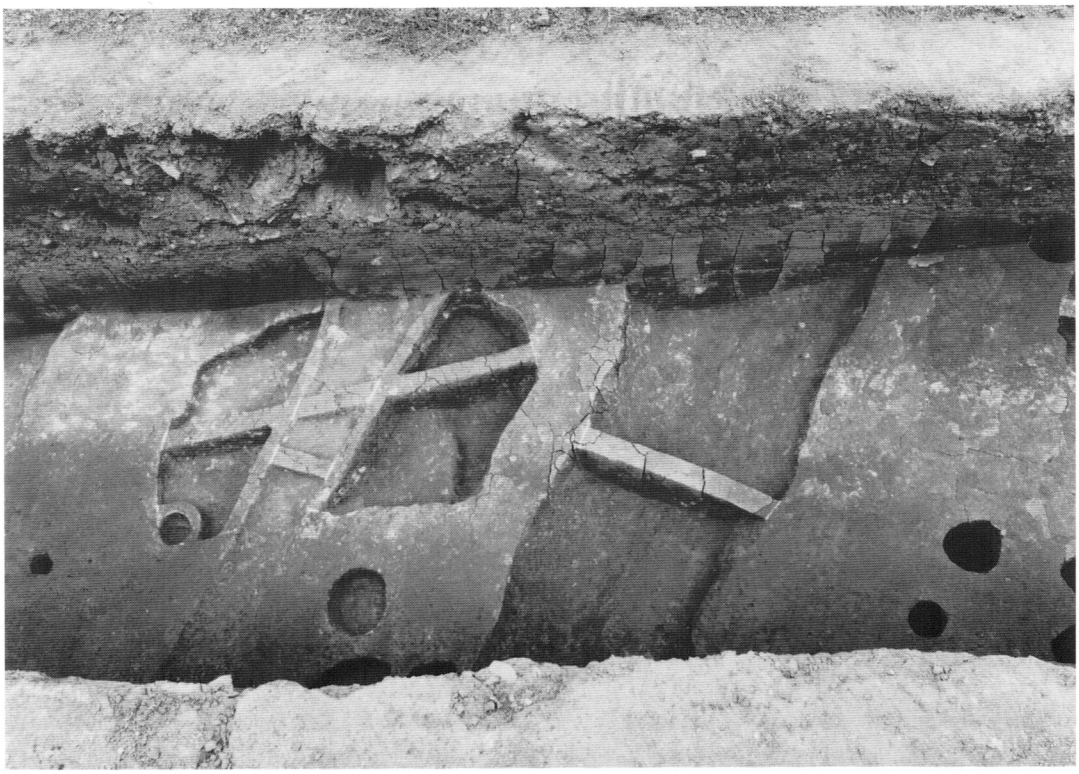
吉田構内大学会館排水管布設に伴う発掘調査(1)

(1)　A区SD1（西から）

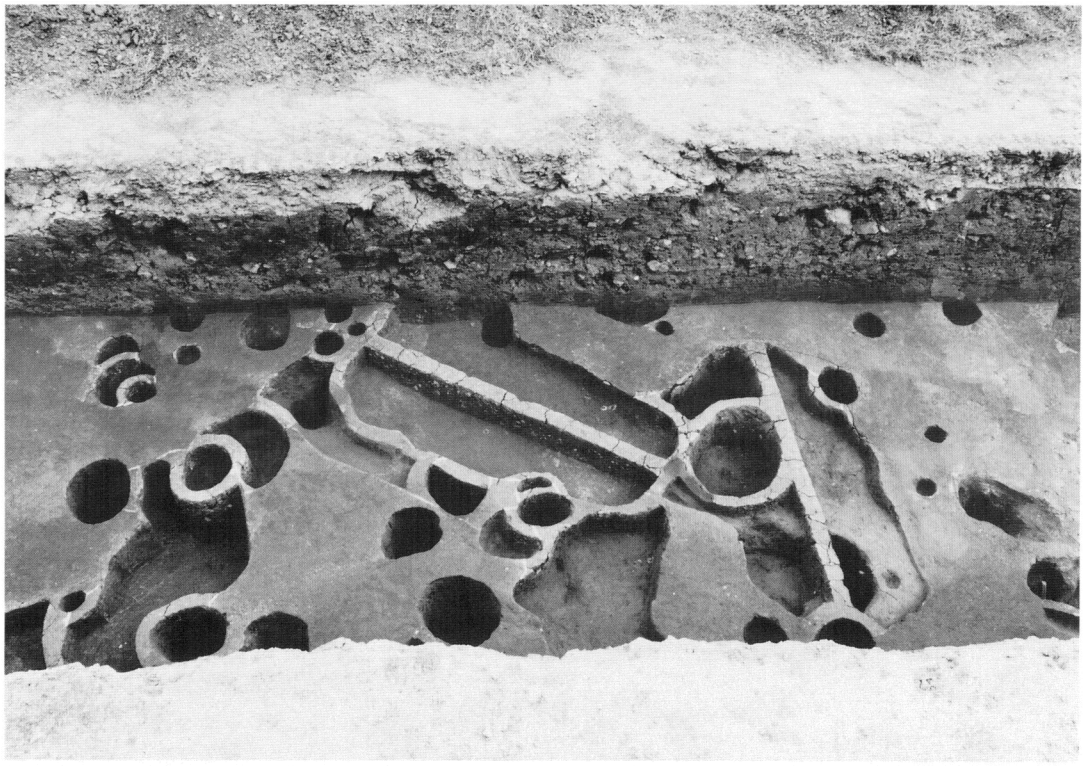


(2)　A区SK1、SD2ほか（南から）

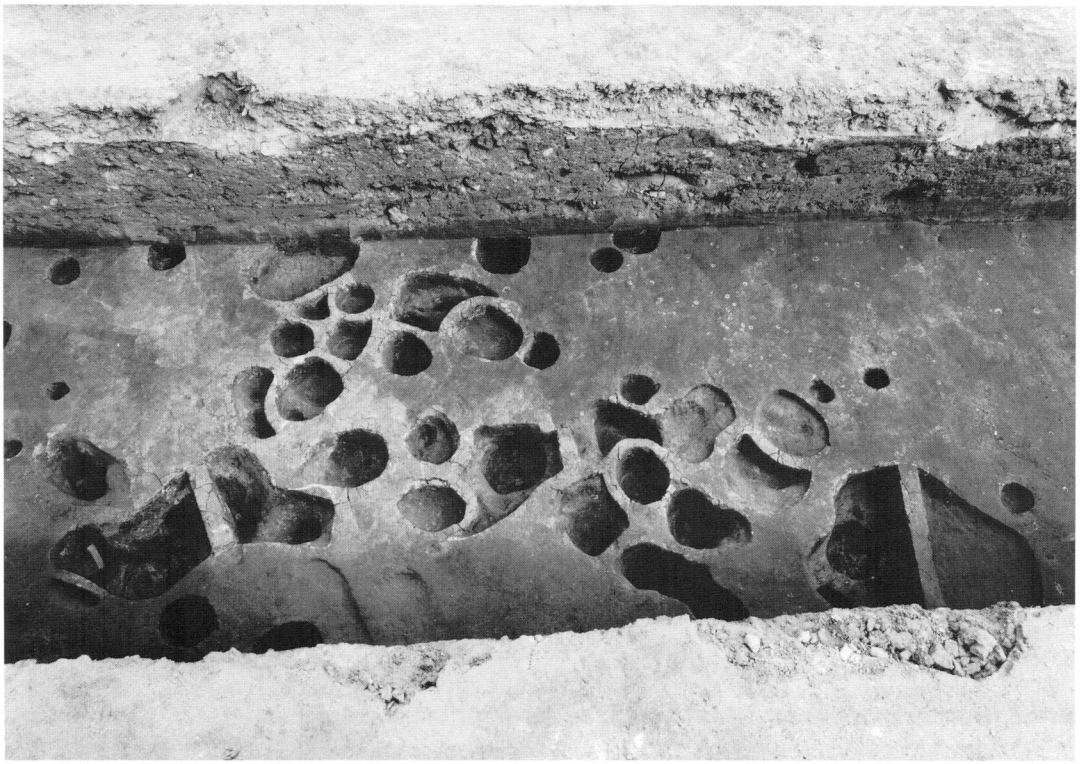
(1) A区SK2ほか（南から）



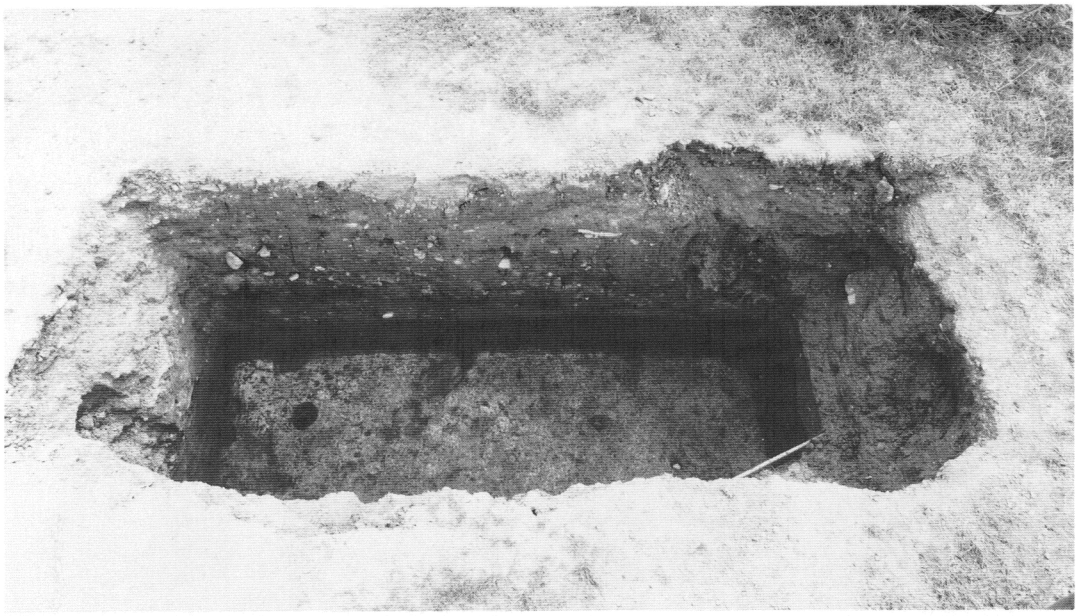
(2) A区SK3、SD2・3（南から）



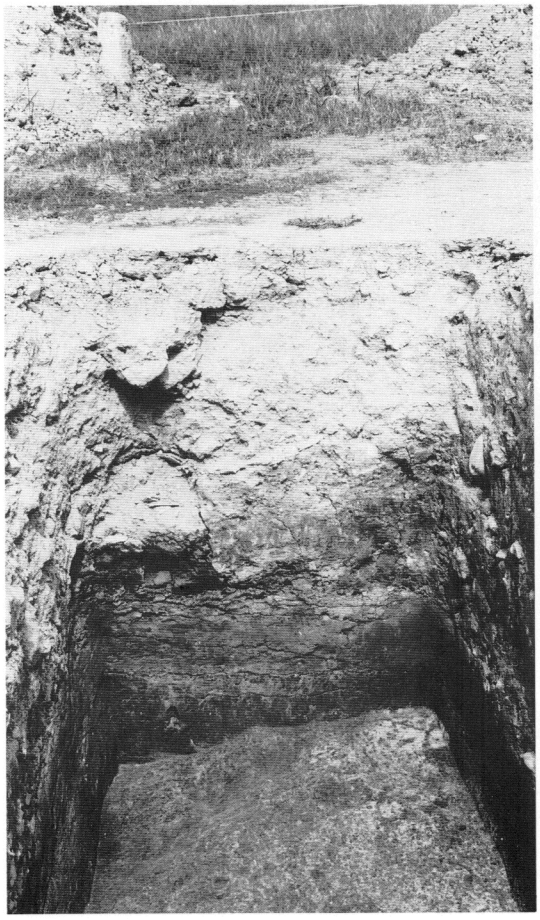
(1)　A区SK5～8ほか（南から）



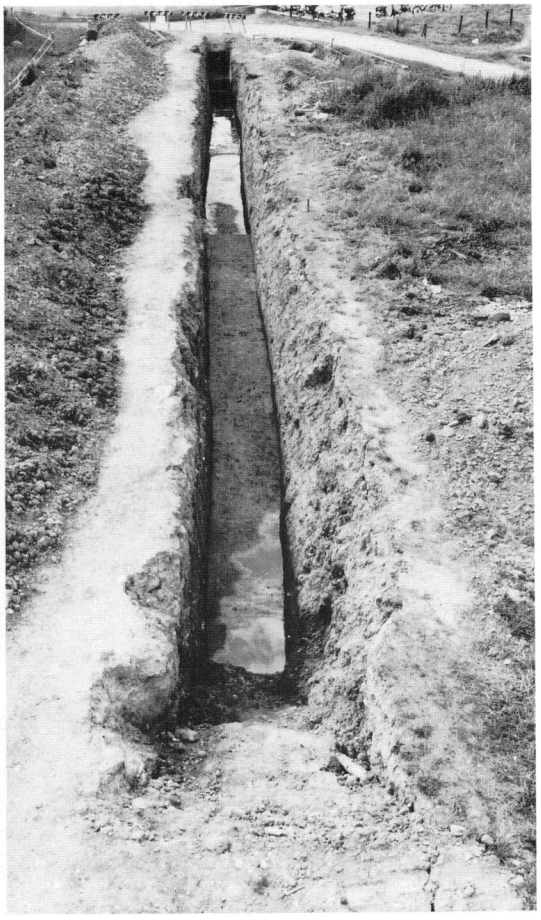
(2)　A区 柱穴群（南から）



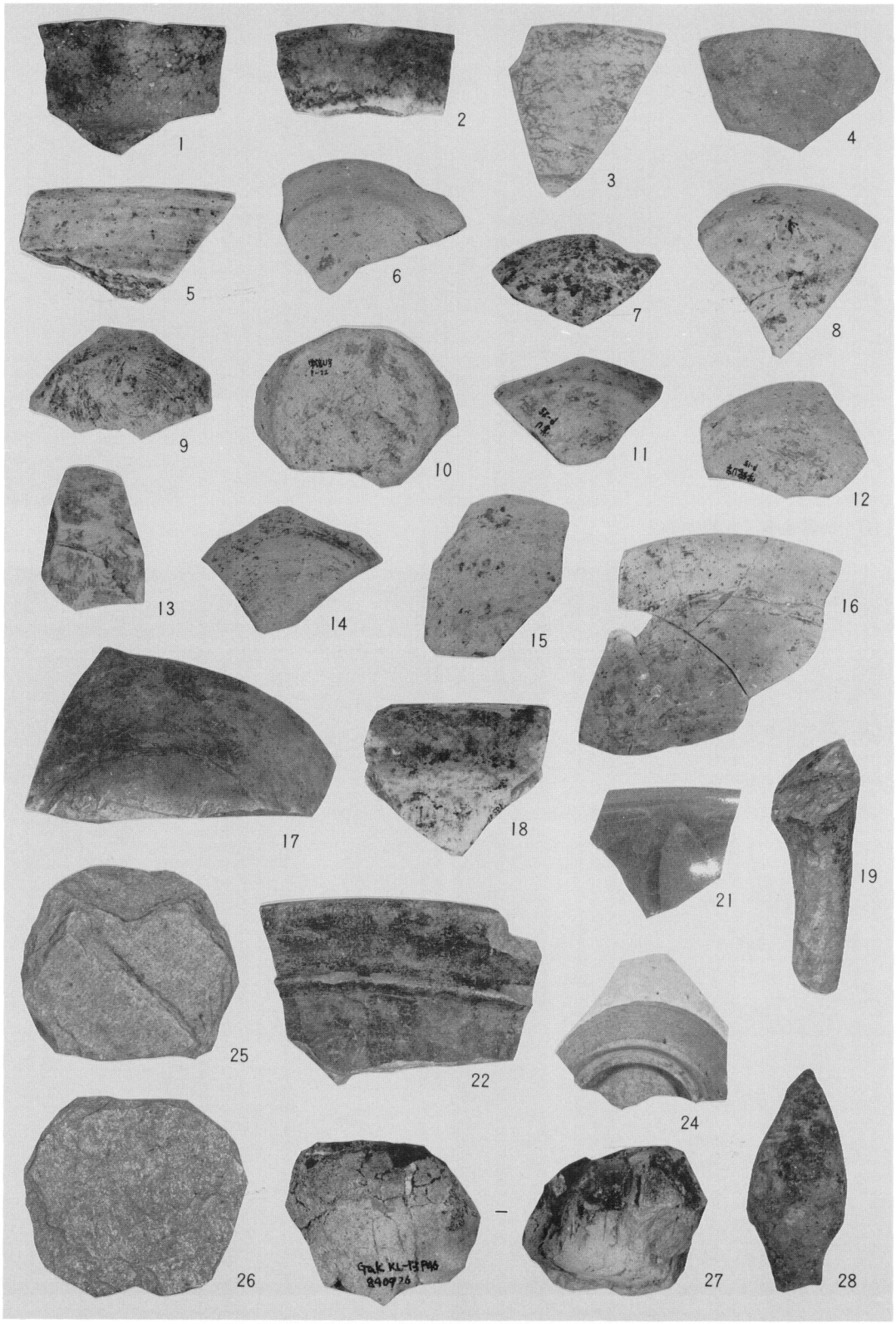
(1)　B区全景（北東から）



(2)　B区北壁土層断面（南から）



(3)　C区全景（東から）



出土遺物